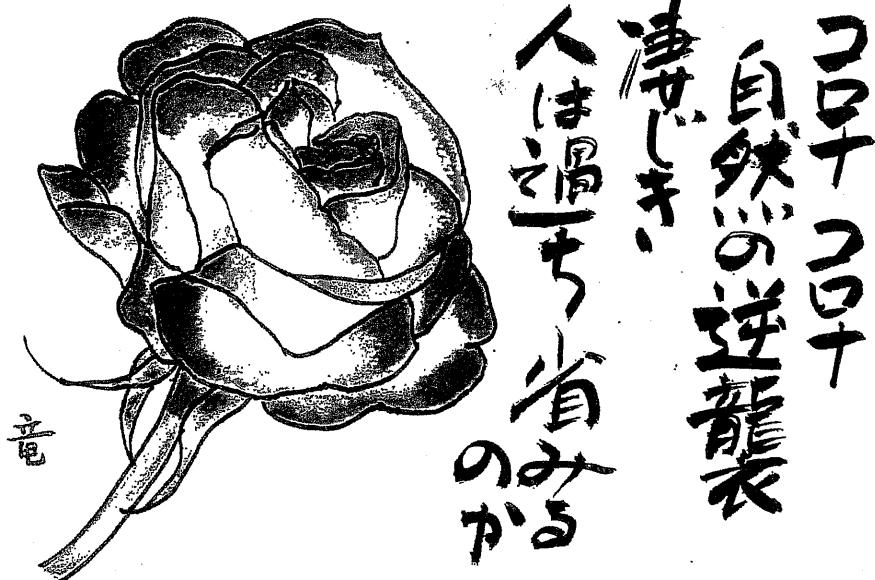


# オリーブの樹

第150号

2020年6月9日

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



★現在ホームページ作成中、151号でお知らせします★

## 目次

- P 2 バレスチナの闘いの5月に 重信房子  
P 5 春の歌 重信房子  
P 6 独居より 重信房子  
■72年ダッカ闘争の顛特集 ■  
P15 1972年5月30日、その日その頃の私は…… パンタ  
P16 1972年5・30の頃 早川義輝  
P18 困難に喘いでいるとき、絶壁の彼方から激励が 足立正生  
P19 救援連絡センターと庄司宏弁護士 山中幸男

## パレスチナの闘いの5月に

重信 厚子

再びナクバの5月、リッダ闘争の5月を迎えていました。1948年のナクバの日から72年目、リッダ闘争から数えても48年目の5月です。

第二次大戦の戦後処理の過ち——とりわけ欧洲の国々の犯したユダヤ人迫害と虐殺の責任を、かつての植民地パレスチナの犠牲の上に「ユダヤ人国家」を建設することで譲った過ちは解決しえぬまま現在に至っています。

イスラエルによるパレスチナ虐殺・追放、民族浄化によって当時75万人を超える住民たちが難民となりました。1948年12月の国連決議194でパレスチナ人の帰還の権利と賠償を決定しながら、イスラエルの拒否によって解決されないまま、今では難民とその子孫の数は600万人を超えています。この数字だけでも、いかに国際社会がイスラエルの占領・入植政策を違法としつつ無力だったのかを示して余りあります。この数字には一人一人の苦しい人生があり、かつても、今もそれは続いています。今はトランプ政権の「米国中東和平案」(米国の看板と衣装を着たネタニヤフ案)に示されるように、歴史の脣箱に葬るに値するイスラエル一辺倒の政策がパレスチナに降伏を強いるという厳しい時代を迎えています。でも、パレスチナはいつも苦しい闘いに直面しながら希望を持ち続けて闘ってきました。

あの72年のリッダ闘争の時代も有利な闘いの環境があった訳ではありません。闘いを通してPLOが認められ、国連に招請される前の厳しい時代です。

70年ヨルダン内戦、71年ヨルダン軍による最後のゲリラ基地ジェラシの壊滅。そして72年3月、ヨルダン王政はパレスチナの代表権を簒奪する「ヨルダン連合王国構想」を発表し、米・イスラエルとの講和に進もうとしていました。もうパレスチナ解放勢力はいらないし、役割は終わったのだと。こうした敗北の時代の条件の中で、だからこそ、ヨルダン王政の背後の米・イスラエルに対し、明確に対イスラエル戦争の局面を開く必要がありました。PFLPのこうした戦略的一步の闘いとして、リッダ闘争は觸れました。更にアタハの「黒い9月」のゲリラ戦がそれに続き、更に国境地帯からのイスラエル潜入決死作戦が続きます。西側メディアから非難を浴びる闘い方ではありましたが、当時の条件の中でパレスチナの声を聴くよう強引に闘い続けたのです。こうしたパレスチナ解放主体の政治・軍事的登場の結果、74年国連総会は初めてPLOアラファト議長を招請し、PLOがパレスチナ人の唯一の代表であると認めたのです。

リッダ闘争はアラブという地域性を帯びた当時の時代と制約の中で、立案された闘い方であったことは否定できません。

5月になると、やはり私の中に強くリッダ戦士たちの姿が蘇ります。レバノンの4月から5月は、最も美しい季節です。アネモネ、キンポウゲ、カモミール(カミツレの花)、ムスカリなど色とりどりの花畠がベガ高原を覆います。草原を駆け抜けながら訓練し、時には近所のペールベックのローマ神殿の石段に寄りかかって語り合う日々。ベガーでの戦闘準備を終えたバーシム奥平たちは、朝靄の中、2,000メートルを越えるレバノン山系を抜けてベイルートに到着しました。一週間程ベイルートで、PFLPと最後の打ち合わせや旅行準備をし、それから欧洲へと発ち、汽車でローマ入りする予定です。

明日出発するという最後の日の夕方、バーシムたちは「オーリードに挨拶に行く」と決めていました。地中海の海岸沿いにベイルートの観光名所である「ビジョンロック」という小さな島のような岩が

そびえています。このビジョンロックの傍らに岩場の岬があります。バーシムたちは岬の岩場から海に飛び込んでビジョンロックまで泳いで寒水泳をよくやっていました。

72年1月24日、水泳中に仲間のオーリード山田が心臓麻痺で水死するという悲しい事故がありました。あの事故以来、「闘いあらば、オーリードと共に」と決めていました。この日、あの岩場でオーリードを弔う最後の機会を持ちました。深紅のケンに似たアネモネ、一面に咲くカモミールの白菊を摘んで花束を作りました。オーリードの好きだったラーメンもサクランボも準備しました。岩場からビジョンロックを臨むと、ちょうど半分程海に沈みかけた太陽が黄金色やみれ色の光線を放射しながら照らしています。「オーリード! もうすぐ会いに行くぞ!」ザラー・ハ安田が大声で海に向かって叫びました。バーシムは無言で、ラーメンやサクランボを一杯投げし、私も花束を海へ放ちました。涙を流しながら立ち尽くしているザラーへの顔を残照が笑い顔のように照らしていたのを忘れることができません。

最後の儀式のような気分で默祷を終えると「さあこれで思い残すことはない」「これから宴会を派手にやろうぜ」と群青色に染まり始めた空を見上げていた仲間たち。

最後の晚餐は、寿司や刺身、するめなどの日本料理やカバブやタッブーレなどのアラブ料理に、地酒のアラクと日本酒。絨毯を敷いた床の上に料理を並べて車座になり、「今日しか、みんなと喋ることできんから盛大にやろう」と食べたり飲んだり頃らかなおしゃべりが続きました。PFLPの指揮官やコーチの家族たちの話に大笑いしたり、羊飼いの少年やパレスチナの裸足の子どもたちのこと、また、大学時代の失敗や武勇伝の数々を競い合って、語り合いました。話の中でバーシムが「我々の闘いは日本の左翼には理解も支持もされないこともあります。連赤のあとだし。でも、かまわんけど」と言いました。「そんなことない。われかる人には判るでしょう」と私は言ったものです。アハマド岡本は「連赤と我々と一緒にされるのは許せんよ。我々は世界赤軍なのだから」と言っていたのを思い出します。そして、連赤のような革命家の死に方があつてはならない。革命家は人民の要求に支えられて、いかに生き死ぬのかを、我々の闘いで示すことだと盃を合わせました。「もう何も思い残すことない。あのきれいな瞳の裸足の子どもたちにさよならを言えなかったのが心残りぐらいだな……」「パレスチナの人々、子どもたちが必ず我々の後に続くのがわかる」話の合間に「仕事の歌」や「心騒ぐ青春の歌」などロシア民謡や日本の闘争歌も歌いました。宴の途中で、バーシムが「肩の凝る話はいらないと思うけど、一言だけ」と断って正座して、「これまでありがとうございました。闘いは必ず成功させる。そして僕らの闘いがパレスチナにとって新しい希望への一撃になる。それがよくわかるから闘いに確信がある。パレスチナばかりかアラブ諸国もイスラエルも大騒ぎになる。それほどの闘いだ。こんな大切な任務を任せてくれたPFLPには感謝している。マリアン、ニザールたちに日本の革命もパレスチナのことも任せた。あとは頼む。我々は必ず最高の闘いをしてみせる。」そんなことを、バーシムは一語一語頗る紅潮させて語りました。「もうこれ位でいいやろう」と照れて言いました。「バーシム、ザラー・ハ、アハマド。あなたたちこそ先頭で闘ってくれてありがとうございます。成功を確信している。必ず戻ってきて!」と私も言いました。もう戻らない覚悟の闘いであることは、誰も知っています。「必ず成功させたら戻るよ。『菊花の葬り』じゃないけど。必ず戻ってくるから。それまで頼みます。」みんなを笑わせてばかりいるザラー・ハがニヤリとして言いました。最後にインターナショナルを肩を組んで歌った後、お互いの手を上へ上へと重ねて、「勝つぞ! 勝つぞ!」と誓いました。こんな風に最後の夜を過ごしました。

もう、これが最後の日、と頭では分かっているのに、人間の生き死ににどうしてあんなに平氣で、または冷静でいられたのだろうと思いつぶつあります。「平氣」でも「冷静」でもなく、使命への

渴望が感情を無自覚に抑えつけていたのだろうと今はわかります。パレスチナの闘いの日常の中に居ると、当時は誰もが使命を果たすことに誇りを持ち、どの出会ったパレスチナ人もその激情を秘めています。バーシムたちも激情を使命貫徹へと一筋に考え、オリードの死の責任を引き受けようとする義理を強く持っていたのだろうと思ひます。それに連赤の仲間の死も意識していました。言い換えれば、当時の私たちは、パレスチナの闘いに全身で尽くし、日本のこと、ことに連赤以降の変化する現実には、全く目を向け切れていませんでした。

彼らがペイルートを發って一週間余りを経て、ガッサン・カナファーニから「今日ニュースを聞くように」と言われたのですが、その日、なかなかニュースは届きません。夜更けて、もう31日の零時を迎えた時、BBCの英語ニュースがトップで「武装した3人の者がイスラエルのテルアビブ空港を攻撃した」と第一声を発しました。待機していたパレスチナの友人たちが思わず私と抱き合いました。「ああ、これだった。やっぱり彼らは闘いを成功させた!」と思った瞬間「唯、任務を!」と押し止めていた感情が溢れ出て、仲間が戦死したという事実の方が逆流のように押し寄せて、涙が止まりませんでした。その後アラブ中がリッダ闘争を支持称賛している日々の中で、リッダ闘争から一週間程過ぎたある日、ローマから投函したバーシムの手紙が届きました。約束通り帰ってきたような手紙です。同志たちへの愛情、悔い、憤り、決意、そんな感情の渦が、私のこれから立つべき位置と人生を決めたのだとわかります。彼らの闘いを継承すること……。振り返れば、未熟で非力な私は、その後、日本、パレスチナ、アラブ、世界の友人たちの支えの中で闘ってこれたのだとわかります。そして、まだ託された想いを果たしきれないままにあります。でも、今でも微力でも闘う人々と共にあらうと思い返しては、誓っています。

パレスチナは今、2020年1月28日のトランプの「中東和平案」公表以降、ネタニヤフ政権は、益々パレスチナ領土の併合に向けてパレスチナ人の住居破壊、追放、入植地の拡大を加速しています。加えて、世界を襲う新型コロナウイルスは、中東、パレスチナにも徐々に拡大し始める中、イスラエルは「コロナ対策」の名で、パレスチナ人への隔離封鎖という強権的な人種差別政策を様々に行っています。ガザの電気、水の欠乏と感染症の危機の中、封鎖を強化するばかりか西岸地区でもエルサレムの10万人の住むパレスチナ・シリアード難民キャンプの封鎖や住民の移動禁止を画策したり、イスラエル内へと毎日7万人の労働者の通う西岸の境界を封じたりしています。占領下の刑務所に収監されている約5000人のパレスチナ人への面会禁止と看守が感染しているのに予防措置無視など、人権団体からも告発されています。即時釈放すべきです。

ネタニヤフ首相は、総選挙で争った「青と白」のガント代表を「コロナ対策」の名で抱き込み、4月下旬引き続き首相の座を確保しました。世界はコロナ危機の中、グローバル資本主義の脆弱さは露になり、新しい構造が求められる時代に入ります。それはさらにパレスチナに過酷な現実突き付ける時代となるかもしれません。しかし、パレスチナの仲間たちがいつも語っていたように「決して諦めない。希望も目標も実現する意志を持ち続ける限り、必ず新しい局面を開くことができる。」「前世紀は敗けたけど今世紀は勝つ」そんな声がまた聴こえます。

厳しいパレスチナの闘いに連帯してきた一人として、どんなに困難でも希望を棄てることのできから告発されています。ない生存の闘いにあるパレスチナ解放の闘いの旗を掲げて進む人々に連帯し、共に進みたいと思っています。リッダ闘争の戦士を始めとする多くの闘いの同志、友人たちの進んだ道へ!と。

カラシニコフ抱きて砂漠に寝ころびて 流れる星の多さを知りぬ

2020年5月1日記

重信 房子

トランプ案拒む金土の怒りの炎オベリスクに刻むパレスチナ祖国

弔いに似合わぬ真紅のチューリップ雪山に果てし君なら似合う

論駁に酔う男らの喉仮見上げつ論より義理だと思いま

## 春の歌

白蓮の枝葉に届きて春を呼ぶ葉子から第一樂章

みぞれ降る不夜城様より眺めればラジオが歌う桜開花と

歌を詠じ不自由の格子擦り抜けて絶叫すること自由を得る

日本でも命の選別始まるかコロナ禍飽和臨界越えれば

ジャスマシンを胸ポケットに番らせて戦士らが行く戦場の春  
パンデミック不要不急も忘れました自由奪われ二十年目



独居よい 2月3日~4月30日

## コロナは労働、生産、流通、消費、経過過程の変革を問うています。

## 重信房子

2月3日 今日はN和尚が新春法要に来てくださいました。新年の法要と節分の法要を兼ねて読経。今日は法昌寺毘沙門講にとって、最大の行事である「寒行」の日で、夜、お題目を唱えながら団扇太鼓を打ち鳴らして、戦災、天災、人災で亡くなつた方々の供養をして、約5kmも練り歩くのだそうです。また、3月には遠山さんの四十九回忌も友人たちで準備されているとのこと。多忙の中、旧友たち（私や遠山さんや）のケアに忙しい和尚です。感謝。

2月4日 立春。今日は少し頭痛で、めずらしく運動のベランダを辞退し、ベッドで読書。昨日と今日届いた、監獄人権センターのニュースレターや「被収容者を支える人のためのヘルスケアサポートガイド」を読んでいます。「刑務所医療改革」受刑所の実情（各刑務施設視察委員会の意見に対して刑務所がどんな措置をとっているか？）今回、熱中症対策・寒冷対策の実情が載っています。多いのは、空調設備や対策の予算不足で「上級官庁に予算上申検討中」です。圧倒的に予算不足です。医療改革では、弁護人が獄内の医療情報にアクセスできないこと、医療内容について外部監査がないことを根本問題として改革を求めています。仏などの刑務施設医療の厚生省管轄を紹介しつつ、医療の独立制や医療保険の適用によって、受刑者も一般制度に加入する実情を示して、日本の刑務所医療の改革を語っています。本当に。特に歯科は保険が適用され、きちんと治療できれば、獄中者はもっと健康に過ごせるはずです。また、東日本成人矯正医療センターができてから、病気などで「執行停止」になることが減じて、センターに収容されているとか。刑務所医療には制約と限界があり、執行停止の拡大こそ望まれます。

うつすらと花の香りが……立春！

2月6日 5Fベランダに出ると寒い！この年一番の寒さです。風も冷たくて。このあたりは八王子も立春から3月上旬までが、もっとも寒いようです。病室に居ると、空は快晴で空調に甘えて

いてベランダに出て寒い！という感じです。「はなかみ通信」読みました。「10才のとき——トフン（兔の糞）の販賣」がとても楽しく面白い。同世代の大黒さんの10才のころ、京都の戦後社会いぶんハイカラです。文化の洗礼の中で過ごしたことが、人格を形成してきたのですね。連載もいくつか終了し、61通目をもって「はなかみ通信」も幕引きすることです。今号は「五九通」なのであと2通しかありません。ゆっくり読み味わいます。希有な「読者の権利」付のこの冊子あと二通……。何かもったいないです。

「チヂの大通り 124号」も届きました。智子先生の歌をまず詠みます。いつも何故か角田一風さんの俳句をそこから描いたりします。手元にはもうないので。今回の歌、「寒の水振り滌し和紙一枚庭に干したり白光の中」「ひとり来て雑木の疎林のあたかし芽吹き待つ枝小さきひかり」「るり草の空よりこぼれしるり一点喪いしもの再びはなく」を共感し遊びました。既に卒寿を越えておられるとか。どうぞ元気でいてほしいです。安重根とその看守だった千葉十七の友情の日韓友好を頗る顕彰合同法要が去年行われた記事もあります。まだ十分読みきれていませんが、いつも送つて下さって感謝しています。

2月9日 新型ウイルス感染拡大がまだピークを越えていないようです。新薬も必死で研究されていることでしょう。これを改善のチャンスという懸念の声もあったとか。クルーズ船は弱点を晒し、現代の世界の小さくなつた結果、感染拡大に驚かされています。

2月21日 「創」「フォーリン・アフェアーズ 2月号」など受け取りました。人民新聞は「検討中」で交付されていません。何か引っかかる記事があつたのか？「アソシエーション」の宝塚みれ発電訪問報告を読んで、こんなふうに地域の住民主権の創造的な実業はとってもすばらしいと学習しています。宝塚市で市民発電所を設置・運営して6号機まで稼働。それぞれ50kW以下の比較

的小さな容量で「ソーラーシェアリング」（太陽光発電と農業を結びつける、営農継続型発電設備）の取り組みのレポートです。食べものの共同購入や反原発の市民の運動から始まっているので、すごいなあと思いつつ読みました。より良く生き、暮らそうとする発想が事業を広げていっています。

2月25日 コモンズが定期的に届くようになりました。Tさんがアレンジして下さったのでしょうか。ありがとうございます。今138号は「オール沖縄とともに辺野古新基地阻止へ」沖縄意見広告運動スタート集会の報告が第一面。他には関西生コンの連帯委ら。労働者座談会では関生弾圧について、更に世界情勢欄も充実。興味深く読んでいます。

2月26日 今日は人民新聞2/5号を交付されました。あ、これですね。1706号の8面、「獄中者への人権侵害」というタイトルの、戸田さんの私への手紙一部、黒塗りに抗議する、という欄のところが「一部抹消の上交付」の理由でした！編集部の文はそのまま「——手紙本文」の一段から三段目が全部再び黒塗りでした。戸田さんのコメントはそのまま載っていますので、元気な戸田さんの様子がちょっと見えます。心意気はよく理解しています。とってもありがたいサポートに感謝しています。

2月28日 今日は青空の起床時です。そっと西の方に黙祷。49年前に日本を発った日。奥平さんらを思い出したからです。25才だった当時の決断は、やっぱり今でも輝いて振り返ります。つまりも過ちもあつたけれども。

3月3日 友人からの便りに「反知性主義」を批判する側の内に潜む「知的エリート主義」を左派や言論が自覚変革なしに新しい状況を切り拓きえない、米国・日本の現状への論評。その点で、反対や批判者とこそ対話し、変革・豊富化をめざす山本太郎を評価して論じています。獄では動画もないし、リアルポリティクスはコミットできませんが、その論拠を考える資料も今後送つて下さること。学習してみたいです。

今日、昼膳にひなまつりのあられ（8g）が添えられていて何と小さな「楽しい気分」を味わい

ました。

3月6日 朝目覚めると、花瓶に刺した枯枝のようだった固い、ところどころにあつた殻が割れてうす緑だったものが、クリーム色と薄紅の蕾の姿を現しました。当初は風雪に晒されたようなコブのような殻が咲くのか…と思いましたが、その殻を今朝は殻を振り落として姿を現わしました！何だか希望の印のようで嬉しい朝です。

運動のベランダに出ると、「あなたのことわかつちやつた！」「下の名前ふさこさんでしょ？」などと複数の人にニコニコ言われました。胸にみな姓の名札をつけていますが、下の名前の方は記されていません。「え？！何で？！」と言うと、「わかるわよ。きのう男が廊下でがんがん怒鳴って原稿がどうのとか丸聞こえよ！」「姓字でもしやと思ってたけど原稿なんか書くのはやっぱりね」etc。そうなのです。他の刑務官は病室に入って穏やかに注意指導しますが、昨日の処遇主席は、廊下から室内に入らず食器口に向けて長々大声。「業務妨害って怒ってたね！」と大笑い。業務に支障をきたしていると怒ってたのですが、話題を避けようと「走ってくるね！」と走りだしました。

病室に戻るとすでにうす紅の入ったクリーム色のシクラメンのような花が開きかけ！花弁を数えると9枚。ああこれは白蓮！辛夷なら6枚の花弁です。ビャクレンともハクレンともまた、玉蘭ともいわれる美しい花！

3月8日 国際女性デー。世界各地で女性に対する差別や暴力、格差などに対して声をあげているはずです。

白蓮、次々と開くと期待したのですが、環境のストレスか、もともと遺伝子のせいか、いくつか蕾のまま朽ちたり落ちたりし始めました。木の枝が、うまく花瓶で生かせません。水を吸いあげないのかもしれません。去年梅の枝もそうでした。

3月9日 女性の日、日本でも性暴力に抗議し被害者の痛みを分から合おうと花を手に集まる「フラワーデモ」が各地で開かれたと新聞にあります。日本は世界の後進国。ジェンダー格差の世界ランキングでも121位でしたか。少しずつあたりまえの人権が発言され、性被害、暴力にたちむかう人々が出てきているのですが、政界に象徴されるよう

に遅々としています。

3月10日 「続・全共闘白書」を送って頂き感謝を求めていましたが、読めば読む程一人一人の人生の重さを感じ概括することがむずかしい。25年前にも同様の質問アンケートをとつて一冊にしていたことは当時知りませんでしたが、今回は、469人の回答を得、446通を有効解説対象として巻末にアンケート集計を示しています。男性回答が400人、女性回答が46人で10.3%約一割強です。当時の学生運動の参加比較も、女性は、一割以下、5%位だったのでは?と思います。全体的に、全共闘運動が多くの方のその後の生き方を大きく規定し、また、その良識や価値観を貫いて生きてこられたことを感じます。当時の私が視野も狭く知らなかつたこと、学習しつつ当時の激動の中に身を置くと、もっと良い無い方ができなかつたこと身につれます。今に至る激しい時代を導いた流れの一端の責任を(不遜な感じ方かもしれないと思いつつ)実感しつつ読んでいます。また、京大の一人の人が、思い出に残る闘いとしてリッジ闘争をあげていて、最も好きな国パレスチナ、キーパー。とあって注目。うれしくなりました。その上、トランプ批判には「パレスチナ支援拠出金停止や、大使館エルサレム移転入植地問題などでイスラエル右派にべったり」とあり、京大の奥平さん、安田さん、山田さんの世代の人だからきっと心に刻まれているのだろうと読みました。私の書いたアンケート分は、5月だったので、獄にはまだ山本太郎のことば聽こえていませんでした。

3月11日 昨日は東京大空襲の3月10日。人口密集地に深夜住民を狙った米軍の虐殺空爆で10万人の人々が命を失った日でした。

今日は東日本大震災9年目。まだまだ被災者の厳しい状況を新聞で知るばかりです。今も避難民47万人、人口減34万人。人々の心に失った人々や故郷を年毎により深く年々刻まれるように思います。2時46分、ここでもその時間が報知され黙祷を捧げることしかできませんが東北にもむかって一分間の祈りを。

3月13日 今日午前中は「コロナ」の影響かハイブリッドなサーモチェックの小さな器具を各患者

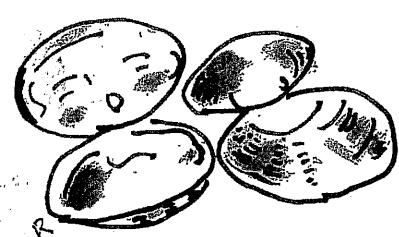
の額に近づけて熱を(体温)チェックしました。Uさんの便りが夕方届き、計報を知りました。蔵田計成さんが3月1日、逝去されたとのことです。お悔やみ申し上げます。蔵田さん程「ブント愛」で貫して文章を書いておられた方をあまり知りません。1950年代の早稲田の学生運動、ブント、安保闘争を聞いて、以降もブント再建も支援し、また、第二次ブントの分解・セクト各派が生まれる中でも「ブント愛」で、どの分派にも暖かい目で記述しておられました。それを知つたのは、公判準備や「日本赤軍私史」執筆で、不在中の70年代以降のいろいろな本、資料をあれこれ乱読した時です。また、2002年2月、獄中の私たちに連帯し東京で檜森さんと共に反弾圧集会を開いて下さったのも蔵田さんです。資料書籍なども送って励まして頂きました。出所が叶えば、ブントの歴史についてあれこれ伺いたいと思ったものです。体調を崩しておられる中、執筆された本も送って頂きました。ブントを総括し、記録を残そうと冷静な歴史観で記しておられ、それらは過去を知る大きな助けとなっています。支え励まして下さった感謝と共に、哀悼の気持ちを記します。大切な先輩を失いました。秋雄さんはきっとお別れに参じたことでしょう。

3月14日 少し寒い。外を見ると隙間から雪! みぞれのような雪が午後ずっと降っている昭島です。ラジオでやはり都心みぞれの中、桜、東京の開花宣言! 統計をとりだして一番早い開花宣言とのこと。みぞれ降る不夜城の外眺めれば東京の桜開花とラジオが“友よりの手紙開けば計報ありブントを愛した蔵田計成”改正特措法成立の記事。“コロナ危機想定外から特措法あつとい聞にコロナファシズム?”

3月17日 陽は春めいていますが、風が冷たい。昭島15°C~0°Cです。資料たくさん感謝します。Uさん、Mさんの語では、辺野古は膠着状態ながら、防衛施設庁が手詰りで、オール沖縄は次々と準備の手があり意気軒高のようです。18,000株のサンゴの移植申請に県は、許可を出さない、軟弱地盤による設計変更は、様々の理由で許可しない、学者たちが活断層があることを提示しており、国は「ない」というなら証明必要。琉球セメントが使用中の岸壁は老朽化で県が取り消しております。

不法使用。まだまだいろいろあって辺野古にはできる訳ないと住民たちは余裕のこと! ねばり強い闘いに応える本土側のスマートな対応ができないのか……とはがゆいところです。

3月18日 届いた創4月号に注目すべきインタビューが掲載されています。「ゴーン事件」の弘中弁護士に浅野健一さんがインタビューしているものです。「ゴーン氏の密出国について闇空からの『逃亡』を許した法務省入管当局の怠慢を批判せず、出国に何の關係もない弁護団を攻撃する斎藤東京地検次席検事らの情報操作に晒されたマスメディアの責任は重いと思う」と浅野さんは述べ、弘中弁護士と信頼関係のある「創」のインタビューリーに応じてもらつたと記しています。読めば当初からひどい刑事司法です。私の時もそうでしたが逮捕してから証拠を搜すやり方がひどい。弘中弁護士は、ゴーンが、どうしてもこのままで嫌だと思うようになったのは、検事のあり方だと示しています。「検事が行った3つのことがあります。一つは、証拠を見せない、それから消す。つまり証拠開示にまともに応じないわけですよ。二つ目には、会社法事件の裁判を始めるのに反対するわけですよ。裁判所は今年の9月から始めると言うのに猛反対して後回しを求める。起訴して裁判始めるなという。それでこの間何をやっているかというと、ずっと海外で証拠あさりをしていました。つまり起訴した上で証拠探しをしたが、いい証拠が、見つからないから裁判を始めるなど。その序方で会社法の裁判が終わるまで奥さんと会わせるなど。ゴーンさんだってどう考えたって無茶苦茶だと思う。それがほっつきしたのは12月。出国はそのせいだと想う。逮捕してから一生懸命証拠探しとは本末転倒」と人質司法を批判。ゴーンが日本で裁判をうけたら「無罪をとれていたと思います。」とくわしく述べています。逃亡の衝撃に地検は弘中弁護士に責任転嫁しようと検事の弘中事務所捜索や、マスコミへの煽動も汚い。ゴーンに保釈条件をそれまで守らせて弁護側には何の落度もないのに。「本当に常識がない」と、メディアのおしかけにもあきれている弘中弁護士。トランプを始め企業経営者は、日産でのゴーンの金の使い方と似たり寄つたり。ゴーンを罪にすれば、自分たちも危ないので協力しないでしょう。こじつけの会社法犯罪です。



3月20日 春分の日! 昨日から直線で300m位離れた昭和記念公園西端の森の一本の木の白い花がちらほらと咲き始めました。今日は、七分咲き位に花盛り。太陽にその桜木がきらきらと輝いています。ほんの少しの森と花見が心を浮き浮きさせます。今、新聞届いて読んでいたら計報を知りました。松田政男さんの計報です。87才だったのですね。私が松田さんにお会いしたのは69年です。赤軍派結成後のころです。文章作業で「世界革命運動情報」誌のバックナンバー入手できなかつと塩見さん、山田孝さんに相談された時のことです。大学の友人の教育研究会のKさんが、レボルト社事務所にも出入りして、その雑誌を読んでいたのでKさんにバックナンバーを貸してほしいと頼んだのです。彼は全部持つていないので持っている友人を紹介すると言って紹介してくれたのが松田さんです。初対面で「失業革命家の松田政男です。40歳までに、革命に命を滅する覚悟で生きてます」というキザな科白にびっくりしました。その際、赤軍派の話をすると、「ブントの擬制的な組織は分解純化すべきで大賛成だ」と「何でも協力したい」と支援を申し出られたのです。以来、多くの人脈、財政、アジトと、いろいろ協力して下さいました。

71年秋に「赤P」のフィルムを持ってペイルートに訪れたこともあります。今は亡き、大島渚さんが電話てきて、「松田さんがユニコーン(当時のみんなの宿り場)でもう帰ってこない。あつちで骨を埋めると騒いでるけど迷惑だろうからさっさと送り返すように!」などと言っていました。その電話もユニコーンからのように陽気に友人らが次々とTEL口に出て励ましてくれたものです。ペイルートで有意義な日々のあと、信原さんや、丁度居合わせた浅井信雄さんらも松田さんに帰国を説得。私も浅井さんのフィールドのカイロまで行って見送りました。その後丁度第四次中東戦争の73年、若ちゃん、守さん、北沢さんらと松田さん合流して大討論。ペイルートからパリへ。パ

リを拠点に「赤P」上映から革命文化戦線構築の準備へ。ところが74年の「パリ事件」で関係ないにも拘らず仏DSTに逮捕され暴力をふるわれ国外追放で帰国を余儀なくされました。こんな風に様々に協力して下さったのに迷惑のかけっぱなしのまま、直接のお詫びできないまま永別を知りました。謝罪・感謝と共に次々と、いろいろなエピソードが浮かびます。合掌。

最後にお会いしたのは2001年、私の公判に証人として出廷して下さった時です。昔どつとも変わらず意氣軒昂に検事とわたりあっていました。その後、Oさんから松田さんが火災に遭ったり、体調を崩しておられることを日々伝えて頂きました。「パレスチナに献花を!」と檜森さんのさんらと一緒に活動をはじめ、檜森さんが自決した後も、あの「かもめの噴水」のところで、松田さんのさんらが、日々の集いを行っていたことを思い出します。Oさんの吹く楽器の曲が聞こえるような春分の日和、一本だけ煌めく桜にむかって惜別の哀悼を捧げます。“春彼岸新聞開けば黒い縁君の計報に出会い息呑む”“初対面黒サングラスに黒づくめ「失業革命家」と君宣いき”そんな姿を思い出します。

3月21日 森の中の一本の桜は満開。でもまわりの樹々が大きいのでそこだけが花で小さく輝いているだけです。四方田先生からお便り。「月光」を送って頂き読んでいること『暁の星一』は全篇これ憤怒の歌です。コスマス(調和宇宙)の背後に紅蓮大紅蓮の炎が見えています。炎帝の向日葵の歌はとりわけ美しく輝いていました」と感想を頂きました。「東京は1944年の軍統制下のように自肅しています。パリはもっと酷いです。皮肉なことですが、刑務所以外のすべての場所が汚染され、監禁状態になってしまいました。」とあります。イランでは刑務所も感染で釈放したとかいうニュースもありました。でも考え方によっては、これは地球生物の人間に対する警告に思えます。「選択3月号」にも気候・温暖化で、永久凍土から蘇生するウィルスで新たなまた、かつて撲滅したウィルスまであるとの記事。(ロシアで炭疽菌が2016年凍土が溶けて復活したなど)もう一つは、人間による「開拓」で、アマゾンやシベリア、更に各国で未開の各地で横暴な生物を脅かし自ら病原菌を人間社会にもちこんでいること。人類の資本の過剰な欲望が生んだ危機だと思わずには

いられません。利権と金まみれのオリンピックの現情否定から考える時でしょう。いい機会。また、4月予定の第29回国連の刑事司法委員会京都開催も中止のようです。

3月25日 Uさんのお便りが夜届きました。不謹慎ながらコロナに何か親近感を覚えると記しています。コロナがあらゆる事の真価を問うているためでしょう。朝日記者の小滝ちひろさんツイッター「新コロナウイルスはある意味で痛快な存在かもしれない」と記して、朝日新聞の「おわび」の社告。こういう記者が過剰な資本の欲望が居る限り朝日はまだ大丈夫か、とUさん。Hさんは「コロナウイルスは資本主義の矛盾を暴露し、新しい世界の始まりを告げる神の啓示か。コロナインタークショナル。人々は考えはじめ行動をはじめ、いよいよ世界革命の時代。人類は自然環境の前で無力であることを自覚すべきだ」と。人間がことにつくり出した自然破壊・気候変動の産物という意味ではコロナは人災、自然の逆襲です。もちろんワクチンが開発され、共生に向かうしかないのでしょうかが、コロナは社会の根本改革をコロナは労働・生産・流通・消費経過で問っています。

目の前の対策と同時に根源的な国連規模の人間社会のあり方が問われている世紀です。コロナ禍は米国からパレスチナ、日本まで弱い立場の人々に冷たい世界の実相を暴いています。こんな社会はおかしい。このコロナパンデミックを変革の武器に!

3月29日 昨夕から桜の花が満開に咲きました。花は80くらいあります。小さな花ですがきれいに咲き、フリージャ、チューリップも盛りです。起床前の早朝、うす明かりに雪!どんどん降っています。フリージアの香を受けつつ雪見です。雪は午後2時頃まで降り、少し隣のビルの機械や屋上にも積もっています。

3月30日 “パレスチナ土地の日なれば闇いの死傷者逮捕者の教案じらるる”と、思わず零れます。コロナが感染し始めている中東で、パレスチナの人々はそれでも闇わざるを得ず、「土地の日」の今日恒例となっている抗議が被占領地、隣接国のパレスチナ難民キャンプで行われているでしょう。今日受け取った資料で、レバノンでも3月19日現

在で感染者は158人と保健省の発表。欧洲と密接なのでこれから広がるのでは……。また、今日は檜森さんが自決して19回忌です。毎年Oさんらと日比谷公園のかもめの噴水の桜の下で、この日を弔っておられた松田さんも逝去されています。今年の桜は様々に記憶に残るでしょう。安倍首相、コロナ、雪など。

4月1日 雨で寒い日。エイプリルフール。ふと檜森さんのことを思い出していました。自死の知らせを受けたのは、エイプリルフールだった……と思いまがら。点呼直前に、再びこの日驚きの悲報が届き偶然。泉水さんが亡くなられたとは……。

ああ何もできなまま泉水さんを逝かせてしま……と、無念と申し訳なさと司法当局への怒りが溢れます。これまで安田・山下弁護士らや、水田ふうさん、Fさんをはじめとする多くの方々が、何とか泉水さんの仮釈放の道を開こうと努力して下さっていました。泉水さん自身も刑務所や検察側のやり方に抗して毅然として国賄賂訴を闘い続けていました。社会に還り一日でも過ごしてほしかった……私ばかりがみんなの願いでした。

泉水さんとの出会いの頃が浮かびます。泉水さんは、若い頃の悪事(強盗殺人共犯)で「兄貴分」に何も知られず付いて行つたのですが、泉水さんが待つてゐる間に惨事を兄貴分が起こし、つかまるると、泉水さんも関わったように供述調書を作られて共犯として、「無期懲役刑」を科されます。(兄貴分は病死)

母に詰び真面目な服役態度で仮釈放も決まっていたのですが、千葉刑務所が囚人の病気を放置しており、いつも泉水さんがフォローしていたので、自分が居なくなったら、どうなるのか……と思い詰めていました。病気が重篤になったのは医療措置をきちんととらないためだと憤り、一人で決起しました。自分が問題を起こして外の社会に非人間的な現象を訴えることで病人を救おうとしたのです。同囚だった民族派の野村秋介さんが出所間近で、泉水さんと打ち合わせて、出所後このニュースを社会に知らしめました。泉水さんは旭川刑務所に移監されますが、囚人は、八王子医療刑院に移され治療を受けることができました。

このニュースを私たちはアラブで知りました。国内の友人たちからも解放を!との声がありました。その結果、77年ダッカ闘争で指名、泉水さ

んは「人質を助ける為なら自分はどうなってかもわないと奮闘に応じたのです。左翼には何の共感もあった訳ではありません。泉水さんは率直な人で、「殺しや、タタキが革命の名で許されるなんて、革命なんて便利なもんだな」と、むしろ批判的でした。出合い、率直に語り合いました。弱く貧しい立場に置かれた人たちが誰も差別されずに公正に生きられる社会をどう実現していくのか、パレスチナ難民キャンプや戦場で語り合いながら、人間らしく、義理や人情のある差別のない社会、こんな革命なら一緒にやってみたいと一步ずつ進みました。

泉水さんの演歌や民謡は、パレスチナの友人たちとの5・30パーティーや戦場での娛樂の集いなどで披露してはやんやの拍手。ある国の革命家は泉水さんと「義兄弟」の間柄でしたが、それは相手が泉水さんの義理堅い、行動から大いに気が合って申し出たためだそうです。言葉の壁を越えて友人になることのできる人です。

泉水さんはまた、刑務所で印刷技術を習得していましたし運筆だったので、編集機関で活動し、当時80年代初期まで国内に向けた「人民通信」を発行し、表題も泉水さんが担当しました。

その後、丸岡さんとアジアでの活動中逮捕され送還されました。検察は「人質釈放」の77年には「超法規的措置」として泉水さんに協力を求めながら今度は「一般刑事犯のくせに」と、意地の悪いフレームアップをマスコミに流しては、不当な拘束強制をつくりあげました。

泉水さんは唯、旅券法違反の普通は執行猶予の付く刑ながら、検察は昔の無期懲役刑を復活させて「一生獄から出さない」という報復的重刑処遇を科しました。こうした国家的な旧日本赤軍に対する政治的報復は、丸岡さん他、日本赤軍メンバーでない友人にも及びました。何としてもこうした弾圧を正そうと、弁護士、友人たちが泉水さんと共に公判闘争を闘い続けて下さったこと、哀悼と共に感謝を捧げます。

また、泉水さんがアラブでくり返し懇しみを語った小さかった姪御さんと獄中ではあれ、交流が復活したこととても嬉しいことでした。

共に考えたり、悩んだり語り合った泉水さんの70年代、80年代の姿が浮かびます。「人の役に立てることはほんとうに嬉しい」と優しい笑顔で話していた泉水さん。フィリピンでも日本でも窮

地を助けられないままに永別を迎える心苦しいです。

いつも困難に立ち向かってくれてありがとうございます。共に闘ってくれてありがとうございます。感謝と共に謝罪が浮かびます。「赤軍罪」の重刑攻撃を死ぬまで背負わせてしまいました。頭の上がらない大好きな「おふくろ」と、彼岸で最愛の夫人と共に波乱の境涯を語り合っているでしょうか。ふうさんにも会えたでしょうか。どうか重荷をおろして、安らかにおすすめ下さい。御冥福を祈ります。3月10日が誕生日の泉木さんに彼岸での再会を期して、おわかれを告げます。

“またしても友の計報の届きこし

快晴の天裂く光よ”

**4月6日** 東京はコロナウイルス感染者日々更新が「最高」。今日の新聞では5日は143人だったとのこと。昭島は1人。そのせいか、今日告知放送で「今日からマスクを1枚配布します。1週間に1枚。食事、就寝、点呼以外は装着のこと。マスクの洗濯は洗濯時間(18時)に水洗いしたい人は許可する」とのこと。自費で、医師の許可でマスクをつけている私は、先週「もう在庫は購入不可。洗って使用するのは許可します」と言われました。自費購入のマスクを持っている人は、それが全部なくなつてから毎日1枚もらえると今日言わされました。大阪拘置所でのコロナ感染も出て、全国的に対策強化しているのでしょうか。

**4月7日** 今日は全員マスクでペランダ運動です。今日の新聞では昭島の感染者2です。午後聴力検査がありました。点呼後、告知放送で緊急事態宣言が発せられた場合、大型連休まで受刑処遇の変更を行うとのことです。宣言が解除されるまで変更は続くとのこと。懲役労働の働き方の変更などが告げられていました。また患者にも関わることとして、面会が原則不可になるとのことです。



和尚のそれを危惧した判断で、すでに4月3日早めに法要を済ませていて良かったです。運動、入浴はこれまで通りに行われること。購入物品は入手不可になつたり、入手期間が遅くなつたりすることがあるとのことです。

**4月9日** 新聞では次々と様々な職種が閉店や中止して、町は人通りが少ない様子です。みんなどうしているのでしょうか。私のところでは朝から9時就寝まで、食事、点呼以外はマスクをずっと装着義務となつて息苦しい。ベッドで安静の時くらい外してもよさそうなものですが、それもダメと注意されます。効果を考えれば、あまり安静中マスクをしなくてもいいと思うのですが……。面会も禁止ですが、運動と入浴は治療もこれまで通りです。

コロナニュースで新聞の国際面には他のことがほとんど載りません。レバノンのデフォルト、イスラエルの組閣など新聞からは知ることができません。丁度点呼後に資料が届き、ペレスチナ占領下のコロナ感染に対して、いかにイスラエルが人種差別的な処遇を行なつているか、が記されています。4人のペレスチナ拘留者がコロナ陽性反応を示したが、5000人もいる拘留者への放逐などの措置はとられていません。ガザでは人口の80%が何らかの形で外国からの援助に依存せざるを得ないイスラエルの封鎖包囲下にあり、水の97%は飲料水となりえず、子どもたちの10%は栄養失調。NGOによれば1000人当たりの病院のベッド数は1.8~1.58、医師は1.65~1.42人、看護師は2.09~1.98人だそうです。その上イスラエルの輸入禁止措置で、X線スキャナーや医療用X線スコープなどの機器の購入が制限されていて、パンデミックとなれば停電や機器の不足で大変なことになります。

また、フォックスニュースによると、米海軍横須賀基地停泊中の空母「ロナルド・レーガン」の乗務員2人がコロナに感染。他の空母ルーズベルトもすでに明らかに。米国は戦争準備より、中国と協力してコロナ対策で貢献すべき時でしょう。

**4月14日** 今日は歌誌「月光63号」を読みました。まだ読み続けている途中です。巻頭は「黒いオルフェイスの歌 月光庵目録 福島泰樹」亡き友を詠んだ歌です。“六〇年安保闘争しかすがに敗

北の風吹き荒れでいた”から始まり血液癌を患い逝った友を独白のように呼びかけのように短歌の枠を越えた視界が開かれる物語のようです。次のページから月光の会員の歌。どの人の歌も必ず好きな歌があつて私の感性に響くよう！“さらさらと身を剥がれゆく薄片の落花一夜は闇に明かして”“とろとろと漆黒の闇に火の生れる<sup>とどろ</sup>なるもの火のかたち見ゆ”など書ききれません。清田由井子さんを偲んでこの人の歌がいくつも掲示されていて、どれも好きで気持が浄化されるような歌です。“ぐだけゆく夜半の夢の彼方より終焉は花のかたちしている”“月の夜は月にまかせてその一世身漱ぐごとく山椿散る”など。歌人たちの歌のことばの使い方、語彙の豊富さに、いつも圧倒されつつ歌誌「月光」を読み学習している私です。そんな私ですが、私の歌も載せて頂き、初めて自分の歌を批評して頂きました。「月光歌選」として前号作品評で、2人の歌人が評して下さっています。一人は綿田友恵さんで、“秋匂う九月になったそれだけで雲の象が変わりはじめる”と“立ち消ぎの自転車、風の肩車われら振り切り兄は逝きました”をあげて、一首はイベント(クリスマスやハロウィン)で季節を感じさせ、消費を促そうとする世の中で、制限された生活故に敏感に感じている点、二首目は幼い時の兄と大人になって以降の兄を重ね、懐懐に心を強く打つ歌と評して頂きました。二首目は添削もあって「風草み」が「風の消車」となつて私も好きな歌です。もう一人は、木下俊介さんの深い批評です。“曼珠沙華逆縁の子に会いたくて会いたくていく燃える畦道”を「前号で一番好きな歌」と選んで批評しておられます。

評されるということは己の潜在的な悟性から理性の面ではなく魂のひだを対象化させるような新しい自覚をつくりだすようです。自分のことばの表現の凡庸性では届かない意味付を与えてくれて、その深さの中で、歌を再び対象化させてくれます。批評されることは初めてだったので驚きもあります。批判、論評、添削によって歌は、よりその本質を光らせるものなのでしょう。私自身は、十代から詩を書いて、二十代のころは、日記のようにもあります情念を詩に吐きだしていました。でも10~8羽田闘争から詩を書くことを意志的にやめました。2000年の逮捕を経て、心に疼く想いを言葉にしたくて、でも詩を書くには

エネルギーがいるので、公判にエネルギーを注ぐので、それはできないと思いました。でも短歌なら想いを一息に吐き出すのでやってみようと思いました。でもことばの使い方も、文法も、土台のないまま零れるままに詠み現在に至っています。「月光」でみて下さるのを知ってから零れた歌をそのままにせず詠み直したり自分で添削したり、少し気取って。そして「月光」の歌人からの添削・批評を受けてより歌を磨いてみたいと欲が出てきた74才の初心者の私。歌を批評される楽しさを知りました。でも今号の「十二月の歌」は、こうして歌人たちの歌の中に入れて対象化してみると、ことばの使い方の弛緩や無駄があつたです。深みや技量は欠如していますが、それはそれとして日記のように心を自分の回路で晒しながらもっと他者に感應できる歌を素直に作っていきたいと思います。「独りごちの記」にもありますが、2018年の遠山さんを詠んだ「三月哀歌」から飛躍のような高嶋和恵さんとのことは、歌にも学んでいきたいと思いつつ読んでいます。今号読んで、手違いで、もし「十一月の歌」が届いていなかつたのなら申し訳ないませんでした。

**4月17日** Yさんからの土曜会報告届きました。4月4日「3密」を避けて①体調の悪い人、発熱の人は次席を②店「祭」の換気を良くすること③人と人との間隔をとること④懇親会は中止。個別飲食はOKの条件だったとのこと。米田さん、クラケンも①に該当して不参加。でも小林哲夫さんを講師に「現在の高校生の戦い」と社会的連帯の可能性を語ってもらうテーマの土曜会。2月11日に開催された「高校闘争50周年」集会の第三部に参加した現役高校生など、若い世代とのシンポジウムをふまえて現在の高校生の戦いを語り、5名の若者たち、当日第三部に参加した人たちが発言し合って、興味深い土曜会だったようです。東洋大で「竹中平蔵の授業反対」の立て看で、大学側から2時間半の尋問と、退学の脅しにあったAさん。校則がない頭髪検査はどういう規定か説明を求める署名運動の中に入学して、管理教育のナンセンスキにめざめて活動してきたBさん。シールズのデモの最後に「警察のみなさん、警備ありがとう」などはちょっと違うと思ったのが、正直な気持ち、との発言中参加者拍手！また、どうして運動というのが都会で上手くいって、田舎では

なかなか広がらないのか、やはり一番苦労している当事者は福島と沖縄だと思ってやってきたCさんなど、皆まっすぐな問題意識を持つていてとても連帯感が湧きました。最後に個別の飲み会は、いつもに似た懇談会！「それでアルコール消毒？ということで日本酒1升瓶2本、焼酎1升瓶1本、ワイン1本、ビール十数本で「消毒」して気勢を挙げた土曜会でした！」とても楽しそうです。

4月19日 「Koide Blue」を読みました。生駒玲子さんの絵筆が捉えた小出裕章さんと、小出さんの語った言葉や文章が組み込まれている本です。小出さんの写真もあります。扉の写真と文で「本書の出版を、誰よりも当惑して感じているのは間違いない私です。」という言葉で始まります。小出さんの反原発を闘う神聖な姿勢に打たれたイコマさんが、2年にわたって描き続けた絵の一部が小出さんの言葉と共に一冊となっているものです。「原子力の問題はすべての課題に通底している差別の問題だと私は思います。」「私は原子力を研究しながら40年以上にわたって原子力に反対して来ました。私の人生は敗北の連続でした。福島第一原発事故によって私は決定的な敗北を喫しました……。しかし諦めた時が最後の負けだと自分に言い聞かせながら、原発と原子力のことについて皆さんにお伝えするために、京都大学原子炉実験所で働くかたわらラジオ出演、本の執筆、週末には講演などで全国を駆け巡る一年半を送っていました」と、丁度定年退職に至るまでの2000年以降、ことに3.11以降の言葉の数々が描かれた横顔、後姿、全身と共に迫ってくる本です。この本は2015年発行ですぐに絶版のためでしょう。回覧して読み継がれています。差別と闘う姿勢、権力に負けても負けても屈服しないし闘い続け、権力の力も知っている人。「悲しいまでに戦士」と呼ばれることもある小出裕章さん。心に触れる出来ることのある一冊です。“負け続けまた負け続け諦めたら最後の負け故闘いに立つ”小出さんの姿勢はパレスチナの闘いにつながって聞こえます。“希望とは諦めないこと闘うこと闘う限り希望は消えない”と。パレスチナの友人の声の歌と共に重なり零れます。

4月20日 コロナは広がり続けているようです。「オリンピック予定通り」といはばって、対策も構想もなく、観光船を封鎖したりと初動も失敗、

もうクラスター捜しより韓国のように大量検査しないと……、と素人でもやきもきします。でもコロナの世紀でグローバル資本主義も変わらざるをえない今後です。「ウォーリン・アウェアーズ」No.4でも「パンデミックによる社会破綻」(プランコ・ミラノビッチ)では、グローバル経済が自給自足的な「自然経済」へ回帰していくのかもしれない見通し、希望も仕事もなく、資産もない状態に放置されれば、怒りが反乱にもなりかねず、

「経済政策が果しえるもっと重要な役割は、ウイルスが作り出す異常な圧力の中で社会の絆を維持していくことでなければならない」と述べています。日本も大胆な財政出動で、とくに弱い立場にある人々を救うような、軍事費など減らす予算の組み替えが必要でしょう。文明国かどうかの唯一の尺度は弱者にどう接するかその態度のことだと中国武官の作家が述べていたのを忘れられません。

4月28日 4・28闘争は昔のことで、そんなことを思い出すのは、私みたいな暇な人か……。パレスチナの資料を読むと、イスラエル政府のパレスチナ人に対するコロナ対策はひどいです。約5000人いるパレスチナ政治犯に対し、看守や調査官の感染が確認されているのに対策無く、囚人の家族面会禁止。7万人の西岸地区からの毎日の労働に移動するパレスチナ人に、境界封鎖、イスラエルに残るか、西岸で過ごすかと。パレスチナ人を分離隔離するのが、イスラエル政府のコロナ対策。NGOなどは、刑務所内のコロナ検査を、国際的に中立な医療団体に求めています。日本で友人たちは大丈夫なのでしょうか。まだ近い人々が、コロナに感染したという話は届いていません。でも、糖尿病や透析、癌既往症の友人など、感染しませんようにと祈ります。

4月30日 世界中でコロナが暴いた弱い人びとの各政府の政策が、はっきりと見えています。日本の立ち遅れが明白です。文明國らしくない。医療現場、労働現場で働く人、職を奪われる人らや、学生、外国人労働者、切り捨てではなく、これまで以上に給料を良くし、消費税も水道、電気なども学費、奨学金やローンも大胆な「徳政」こそ必要では？早く！緊急事態宣言と共に発すべきだったでしょう。5月を明るい5月とするために。

## 1972年5・30ダッカ闘争の頃特集

### 1972年5月30日、その日その頃の私は……

#### 頭脳警察 PANTA

1969年、「スバルタクスピント」と名付けられたグループをやめ、新たに12月に結成された「頭脳警察」、70年の4月3日に神田共立講堂で催された第三世界のヘッドロックに出演したのが最初のステージだった。白ヘルメットで埋められた日比谷野外音楽堂の革共同集会で拍手歓声野次怒号の中でブレヒトの「赤軍兵士の詩」を唄ったこともあります。当然、掲げられた旗竿で埋まる会場にはブレセトもタソもなく、「俺たち赤軍は真っ赤な夏の子だ」歌と演奏が鳴り響き、いま考へてもあのような政治集会であんな歌を聞かされたら、中核派でなくとも憤慨して石を投げてもおかしくなかつただろうと思う。

三里塚幻野祭でも「銃を取り」唄い、日劇ウエスタンカーニバルではフォーリーブスの少女ファンの前でパンツを下ろし「言い歌なんか要らねえよ、でめえの×××に訊いてみな」と唄い、出演のミュージシャン仲間たちが快哉を叫んだ。

そして1972年となり、当時のビクターレコードの洋楽レベルであるMCAよりオファーがあり、ファーストアルバムをレコーディングすることになったのだが、赤坂東急ホテル内のMCAにて自分が「T製作部長に、Tさん、いくらなんでもこんな歌は無理だからやめましょうよ」と提言したところ、ついでPANTA、大船に乗ったつもりでいてくれと言われ、そこまで言われるなら仕方ない、やりましょうと千駄ヶ谷東京都体育館と、京都府立体育館でのライヴレコーディングを敢行したところが案の定、プレス前に発売中止のお達しで不可となってしまった。それはそうだ、世界革命戦争宣言が一曲目に入ったファーストアルバムが発売を予定された二月、世の中のテレビのプラウン管の中では浅間山莊から生中継で鉄球が飛び交っていたのだから、それはビクターとしても発売を控えねばならなかつたに違いない。

俗説にはいろいろあって、洋楽レベルが邦楽を制作するなんて、という既存の製作部からのチクリがあったとか、皇室がらみの話しあつたりしてミステリアスなファーストアルバムのエピソードとなっている。慌てたMCA制作部は急遽ス

タジオ録音に替え、戦争宣言とか、エロやドラッグな表現を外し、ニューアルバムの制作に取り掛かり、かなりの突貫工事&割り振りで5月の発売を決めたセカンドアルバムだったのだが、今度は今度で、イスラエル・テルアビブ空港にて日本赤軍の乱射事件が発生。レコード倫理規定委員会より即刻、発売中止勧告。各販売店より個別回収せよとの指令が下り、おかげでデビュー・アルバム、そしてセカンド・アルバムと二枚続けて発売禁止になつたグループなんて世界広しと言えども「頭脳警察」くらいしかいよいよ。

赤軍派のみなさま、ギネス並みの名誉をありがとうございます。そんなものだからツテを辿つて、赤軍派に今度、何か作戦を実行するときには事前に教えてほしい、そうしてもらえば発売時期をズラせるからと連絡したような、しなかつたような記憶も遠いです。当然、そんな極秘の作戦なんて外に漏らせるわけがないが、ワキが甘い赤軍派なので大苦難のようになると聞者を惹き込ませられたりしたら困るわけなので……。

そういうふうこんなエピソードもある。当時、自分の乗っていたシムカ1200Sという大好きな車のミッションが壊れてしまい、日本で20台走っているからいかの希少車なので、パートも手に入らず、困った挙句、フランスの日本大使館にいる友人に壊れたページを送り、これと同じものを買って送り届けてくれと依頼した。それから半年、待てど暮らせど届かない、船便で送ったのかな、いま喜劇あたりを廻ってるのかな、などと悠長に構えながら待つことさらに一年強、とうとう痺れを切らし、パリへ連絡をさせてもらうと、あれからすぐに航空便で送ったと聞き、驚きに震える手で便名を調べ上げたところ、なんと、なんと日本赤軍にハイジャックされてベンガジヤで爆破されていたのだった。茫然自失とはこのことで、ブルジョアジーの権化のような車のパートのことで赤軍派に文句を言うわけにもいかず、海に向かって赤軍派のバカヤローと怒鳴っているのが漫画になつたのだった。云つても仕方ないこととわかっていないながら、塩見さんに軽く文句を言

わせてもらったこともある。

それから数十年経ち、重信房子さんの詞で「ライラのバラード」を含む「オリーヴの樹の下で」をレコーディングし、発売出来たことに歴史の縁を強く感じ、これほど嬉しかったことはない。一度、小音の窓越しにアカペラで聴いてもらい、途中で刑務官に止められたことがあったが、早く彼

女に全曲聴いてもらいたい想いでいっぱいだ。いまこの島国がコロナウイルスで戒厳令の夜もどきになっているが、房子さんの環境のほうがいまは安全かもしれない。高齢化したみなさんにもどうぞ元気に生き延びてもらって、房子さんを囲みながらみんなで密室密着密接密談密会な夜を盛り上げられたらと思う。楽しみに待つ。

## 1972年5・30の頃

たとえば、僕が大好きな本を繰り返し読むということ。

書かれてある事物や事象が同じであっても、何回か読み直すうちに何故か違った感想を持つことがあるだろう。その意味で、あの1972年5月30日は、僕にとって今も毎年のように違う印象が湧き出てきてしまう不思議な時間と空間を形成している。かすかな視界に映る多面体は今も謎のままである。

この日、何をしていたのかは、もう覚えてはいない。

それどころか僕は、1972年そのものを記憶の彼方に消し去ろうとしていたので、実のところ、2010年にレバノンへ一緒に行ったライター・島崎今日子から、「早川さんって奥平剛士さんと面識ありますよね？」と聞かれたとき、「いや、弟の純三はよく知っているけど兄貴とは会ったことがないよ」と反射的に答えてしまった。丸岡修くんのときもそうだ……「いや、会ったことないよ」と。

僕は思わず嘘をついてしまったのか。でも、それは違う。僕は本当に忘れてしまうことによって、自らを再出発させるように彼らと親しくつきあつていた頃の記憶を僕なりのやりかたで散漫に敵かに地獄深く、あるいは天空の彼方に「安置」したのだった。それも、ありつけの愛を込めて……

物語は、どこから始めるかで、その着地点が違うのは言うまでもない。

僕にとって1972年は少なくとも始まりではなかった。どこが適当かというと、やっぱり1969

年京都の立命館大学に入学してからだ。だけど、

この大学でのことを語るには、きっと全生涯を費やさねばならない。ここで僕の人生というか運命は決まってしまった。その後、立命館に入ると

元立命館大学全学評議会書記長・早川義輝すぐにノンセクトの運動を自ら立ち上げたが、いつ果てるともない民青との闘争に延々と付き合わされることになった。そういう日々の中で69年6月に先輩だった高野悦子さんを失う……

その涙も乾く暇もなく僕らは、残りの69年全部を激しい反代々木闘争に費やした。もう全共闘は名乗れない。地道なクラス評議会活動で、ようやく300人ぐらいの隊列を出せるようになった無党派・パルチザン系の稀少な部隊であった。拠点は当時もう学外に追い出されていた千田さんや天野さんらが居た銀閣寺アジトだった。ここで、福西さんや中道さんら京大のパルチザンとも毎日一緒に暮らした。白樺を開いたばかりの高瀬泰司さんや浦田のオッサンとも、この頃に知り合った。C戦線の片岡くんや敏・吉國くんとも。後に檜森孝雄たち立命館赤モドの連中も合流した。借りていた借家は安田安之くんの親戚の持ち物だった。借り主の香川さんはドイツのマックス・プランク研究所に留学中だった。

70年の秋には、学生大会で勝利したにもかかわらず、圧倒的な民青のゲバルトにやられて、とうとう再びキャンパスを去ることになり僕は同志社学館へ亡命した。串島慎介さんや村上政夫さんが失意の僕を温かく受け容ってくれた。

他にも全学闘の水瀬さんや久賀谷くんらは、とても良くしてくれた。

71年は、もう自然の流れで赤軍派学対として活動していた。先輩の大越さんの面会とともに行つたし、彼の大苦難裁判の傍聴にも鶴見俊輔さんらと学生を動員して駆けつけた。だから、この頃の僕は同志社学館に毎日居たことになる。

当時の僕たちは二部学友会の学館BOXを私物化しており、京都外大のHくんと京大のNくんと僕の三人が、いわゆる革命戦闘京都府委員会で、

ほかはシンバの同志社二部学生だった。たった二人でその後の後退局面を闘っていた。

あれは、その年の寒い頃だったか。

大切な二部学友会委員長だったSくんが突然にBOXに来なくなり、Hくんと二人で大阪鶴橋駅前の焼肉店をやっているという彼の実家まで迎えに行った。というよりは再オルダに出掛けたのだったが、なぜかそのときのことは、よく覚えている。突然に忙しく店を切り盛りしているオモニが、夕方の書き入れ時だというのに他の客を断つて店のシャッターを閉めてしまった。

オモニはビール一本とおつまみを出してくれたあと、あわただしく僕らに「なんであんたら来はったんかは分かります。これが飲んだあと、もう黙って何にも言わずに帰ってくれはりませんか」と、いきなり機先を制されてしまった。

「あんなアホな子やけど、うちちらにとっては大事なひとりっ子なんや。お願いやから、もうあんたらの仲間から足抜けさせてくれへんやろか。ごめんなさい、このとおりや、なんとかしてください」と、涙ながらにテーブルに額をこすりつけて懇願されてしまった。

Hくんと僕は、うろたえる暇もなく「分かりました。オモニ、お顔を上げてください。僕ら彼に別れを言いたいと思つただけなんです。誤解しないでください、ちゃんと会つておきたいだけですから」と、思わず、どちらからともなく口から出まかせの言葉を吐いてしまっていた。

「ああ、そんなら息子を今呼びます。ちょっと待ってください」とオモニは前掛けでぐしゃぐしゃに涙を拭きながら、二階にいたSくんを呼んだ。Sくんは、もう泣いていた。「ごめん、もうどうしようもなかつたんや。先月からアボジが心臓病で入院してしまって。そやから大学辞めて店を……」

帰りの京阪電車の中で、Hくんと僕は終点の三条京阪(当時)直前まで、ずっと押し黙ったままだった。突然に、「なあ、原ちゃん(僕のコードネーム)。オレら、あかん奴らやなあ」と、つぶやいた。「ああ、そうかも」と答えるほかなかつた。

その数年後、優しく色白で華奢で、お洒落のセンスのあったHくんも自らの命を絶つたという。今もなお、なんでも話し合う親しい仲間だった彼の顔が浮かぶ……。

その後、矢継ぎ早に僕らを取り巻く状況が変わり、その度に貴重な仲間を、次々と亡くしていく。自分だけの決意では、どうしようもない時代だった。

71年、封鎖解除した大阪商大の全共闘の末路、清水谷から日比谷至28で京都から來ていた連車、5月に京大法経二番での蜂起派集会で遠山美枝子さんや京浜の尾崎充男くんと出逢い、6・17明治公園の直前に学館に來ていた不詳の同志たち、出版社の労使闘争で頑張っていた山畠幸さん、打ち続くM作戦の後始末で、わざわざ京都に日く付きの荷物を送つてくる賄天気な仲間たち、文字どおり怒濤の季節だった……。知る限りのたくさんのひとを巻き込んで不条理な迷惑ばかりを掛けた。そんな緊張が続くと、当たり前に身体を壊してしまう。皮肉にも洗面所を真っ赤に染めたのは共産主義ではない、僕の胃や十二指腸から絞り出された血だった。吐血して一週間で、実に10kg近く体重を減らした。やむを得ぬ郷里での長い入院治療も、そこそこに切り上げて京都に舞い戻ったが、もう誰も居なかつた。戻るべき原隊は無くなっていた。隊列は市民社会に溶けして僕はひとりになつた。

72年の幕開けは、僕にとって余りにも残酷な日々となつた。知らぬ間に、遠山さんも山田さんも尾崎くんも山に行つていたのだ。山なんかに行って何が出来たと言うのだ、ちょっと前まではカルロス・マリゲーラの<都市ゲリラ>だった。

しばらくして、立命館の先輩の故・物江和子さんたちが、誰かの母子手帳取得の件で奔走しているのを直接聞いた。それが森恒夫さんの忘れ形見のことだと知るには、なお数年を要した。大阪の敏・西浦隆男さんも獄中だつた。

形容する言葉もない72年の幕開け、そんな悲惨さの中で、またも僕は体調を崩してしまつた。けれども警視庁も京都府警も、なんの遠慮もなく毎日のように僕の下宿を訪ねてくる。とうとう、黒塗りの車を玄関前に横付けしたまま、一乗寺の角に陣取つていた。善意の大家さんや同居人らに迷惑はかけられない。

銀閣寺アジトは、既に総監公告事件で被逮捕者を出しており、危険な僕は出禁になつてしまつた。蜘蛛の子を散らすように皆がいつせいに潜

つていった。

僕が、お世話をなったのは、今の家人が勤めていた南区の病院の近くにあった氣の良い在日のご夫婦の一軒家だった。だから公安にも僕はしばし行方不明だった。だけどシクシクと痛む腹部は、いっこうに良くならず、また再入院を余儀なくされそうな、まさしくそのとき5・30に奥平くんたちの悲報を聞いた。

そのヶ月後、檜森が河原町今出川で逮捕された。旅券法違反だという。

彼は、直前に石川県小松市のホモドの仲間である\*斎正敏(後に参議院議員)さんを頼って、定職を得て帰国後の自分を立て直そうとしていたらしい。そこらの事情は、僕らの出した本『水平線の向こうに』に書いてある。

僕らの無定見な青春は、たとえて言うなら着地点を探そうとしても絶対に見つからないやつだつた。僕らはただ時代の中で、自分たちの自由と正

## 困難に喘いでいると、紺碧の彼方から激励が

あの頃、私たちは、二つの困難というか、問題に直面していた。

全ては、映画『赤軍-PFLP・世界戦争宣言』の上映隊運動にまつわることだ。

東京から関西そして九州へと、真っ赤なバスに乗って、各地で上映・討論集会を開いて回っていた。その旅には、口コミで集まった活動家たちが各地で降りたり乗り込んだりしながら、暴力革命路線の発展を模索し、あるいは論争の末に決別したりしていた時だ。

そこで発生した問題の一つは、『連合赤軍』の山岳ベースで“同志殺し”が発覚し、1972年2月から3月にかけて、新左翼勢力による暴力革命路線への懷疑と動搖が、全国的に生じはじめたからだ。集会を開いては上映後の革命論・蜂起論の論議を活発化させ、論議を通した各地の戦線や闘うグループとの交流も活発だった。ところが、“同志殺し”的の発覚後は、討議の軸が人民武装の課題やゲリラ戦法などからズレ、同志殺しの真相追求と武装革命への懷疑論議の方向へと変わって行った。いや、変わって行かざるを得なかつた。

上映隊としては「動搖して悩む必要はない。革命の長征には、多くの困難や敗北的なミス、過ちが山積する。それらを前進のための教訓として行

義を欲しただけなのに、余りにも結末がお粗末だと思った。残念にも革命戦争とか蜂起貢獻とかといふ大きな物語を優先するあまり、僕らの身の回りの小さな物語に気が付かなかつた。未熟というよりは、ただ若かつただけなのかもしれない。

あのとき、自分が何をしていたのかは、だから記憶のままにしてある。

それでいいのだ。それだからこそ、先に逝った皆を心から送ることができる。

1972年は僕が困り果てて、明日の行く先すら覚束なかつた頃のこと……

花冷えに襟立て歩く高瀬川  
象山遭難碑変わらず在りて

(\*文中の観さんは「いとう」と読み。社会党・村山富市氏と委員長選挙を争った。)

私たちは悩み、右往左往した。

上映隊としては、国際主義の運動展開を根付かせるつもりで出発したが、逆に“犯罪者”としてフレームアップされるのだ。上映隊自身が燃り出されて行く流れを止めることこそが、何としても喫緊の課題だからだ。

しかし、回答が出来ないまま、上映隊が調整を続ける無謀を批判し、去る者も出始めた。だが、それでも「やるってことだ！」と一本気の上映隊の意気は高く、そのまま“全国長征”を突き進むことで一致した。それが出来たのは、敗北を前にしても、何とか革命への確信だけは手放さまいと踏みとどまる活動家たちと出会う中で、むしろ、革命宣伝を担う上映隊の任務の重要さを以前よりも増して感じていたからだ。

そこで、私たちが行動は、逆にステップアップすることだった。“敗北と困難を革命の糧に、更に撃って出よう！”と言う意図を鼓舞し合って上映隊を一つから二つに増やし、キャンペーン活動を拡大し続けることだった。第二、第三の上映隊が、東京から東海地方、東北から北海道地方での活動を開始した。初めはキャンペーンの協働を拒否した連合赤軍の指導部は壊滅していたが、救援グループが率先して乗り込むようになり、彼等が“同志殺しの敗北統括”提案して論議する場にもした。

そんな時、1972年5月30日、日本人三戦士がイスラエルのツヅダ国際空港で決死の襲撃作戦を実行したニュースが伝わって来た。

待っていたかのように、日本政府と警察は、リ

## 救援連絡センターと庄司宏弁護士

救援連絡センター事務局長 山中幸男

私が庄司宏弁護士と知り合ったのは、1969年10月26日の都立大学バリケード封鎖解除のために、大学当局が警視庁機動隊を導入して、當時徹底抗戦の学生・院生ら男女九人が碑文谷警察署に逮捕、起訴されたことに対する救援がきっかけです。目黒区自由が丘の自宅で開業・事務所についていたのが庄司宏弁護士だった。奪還闘争の四人逮捕も含めて、当時の私は、都立大闘争救援対策本部の責任者として(私はまだ二十歳)弁護人を引き受けた。庄司先生とは、これをきっかけに亡くなる1991年までの長い付き合いとなりました(ほぼ二十年余)。

ツヅダ闘争は“同志殺し”の延長であり、冷血極まる大量虐殺事件としてマスコミを煽動員し、上映隊をも攻撃して來た。

三戦士の一人・岡本公三さんの日本出国の旅券や旅費準備を援助した映画監督・若松孝二是「事情聴取」という取り調べを受けた。彼は「俺を共犯者扱いしやがって！」と怒り、「上映隊の踏ん張りと共闘する！」、「この闘争は、パレスチナ占領を続けるイスラエル、それを一方的に支持する欧米と日本の犯罪を暴き、民族の独立を求める正義の闘いだ」と言う一点で合意してくれた。そして、マスメディアを使って悪宣伝し、闘争批判の潮流を作りだすのに対抗して、「闘争正義！」キャンペーンを積極的に実行した。

このキャンペーンを通して、アラブ地域と言えば石油資源としてしか知らない人々も、パレスチナへの占領というイスラエルの新植民地主義の実態を初めて知り、キャンペーン支持を表明する人々が立ち上がり始めた。

『赤一P』上映隊は、このツヅダ闘争が実行して見せた「隊伍を整えよ！」という原点によって、直面していた二つの困難への解答を得て、共同者が百人を超える大進撃を開始した。

そして、「世界革命戦線情報センター(IRFIC)」へと発展して行った。あらためて、国際義勇軍活動の実行が示した武装キャンペーンへの確信を得たからだ。

まさに、上映隊には、紺碧の空の彼方から、絶大な実証例が届き、三戦士の志と闘争心を引き継ぐ決意に燃えたのだ。2020年4月30日記

「救援」紙37号(1972・5・10)と39号(7・10)は、いずれもその一面で「救援連絡センター庄司宏弁護士への選任要領」の変更を大々的に告知しています。

そして、5月30日のリッダ戦争(イスラエル占領下のテルアビブ空港における、PFLPによるゲリラ作戦に日本人三名が参加)で岡本公三さんが、イスラエル当局によって逮捕された。庄司宏弁護士は、この時、岡本公三さんとの面会を決意して空路イスラエル・テルアビブに向かうわけです。私は、びっくりした。救援連絡センターの役割りとして、被逮捕者に対する弁護士接見の手配といった重要な役目がありますが、「イスラエル・テルアビブかよ」と、まあ、目が開かれた思いでした。庄司さんが、当時、私にとつても親父くらいの世代でしたが、聞けば、戦争中は、モスクワの日本大使館に外交官として赴任、敗戦後日本国外務省の事務官として、米国に亡命したラストウォルフ供述によってでっち上げ逮捕・起訴されるも、刑事裁

判では無罪を勝ち取り、弁護士を開業した、という持ち主だった。

今思い直すと、当時「リッダ戦争」とも呼称出来ず、「テルアビブ戦争救援委員会」なる名称で、会議を行い、ニュースを発行していた。丸山照雄さんの関係で新宿の某ビルで会議があったときに足立正生さんとも出会ったような記憶です。この年の夏のお盆(八月十五日)に、京都大学西部講堂で「パレスチナ戦士追悼集会」が行われ、庄司弁護士とともに参加している。これらは、当時、救援連絡センターとしてというより庄司、山中それぞれ個人的なものであった。去年十二月に発行された「追想にあらず」の中の重信房子による「資料日本赤軍の軌跡」と対象しながら、あらためて私の係わりは薄かったように思う。

1972~73年、私は、73年一月森恒夫の東拘での自死、この頃事務局員は止めますが、三月以降は、「土日P爆弾」フレームアップの本格的捜査に対する救援活動、などで日常的には忙殺されていた。

#### 149号の誤植の訂正とお詫び

表紙 発行日 「2019年」→「2020年」  
5頁右列下から22行 「ること」→「ていること」  
5頁右列下から18行 「別便でお」→削除  
6頁左列9日の日誌の下から9行 「今を」→「今も」  
9頁左列9日の日誌の下から18行~15行 「ゴーン事件」は「へ念じています」削除(内容重複)  
10頁右列上から10行 「していました補聴器」→「していました。補聴器」  
16頁左列3行 「サウジ」→削除  
16頁左列4行 「エジプト」→削除  
16頁左列下から6行 「分離壁」→「分離壁外」  
16頁右列上から12行 1行アキ詰める  
16頁右列下から5行 「和平交渉の」→「和平交渉に」

17頁右列上から2行 「アラブ占領地」→「全アラブ占領地」  
17頁右列上から9行 「即時~」→「~~アラ~~イスラエル軍の『即時~』」  
17頁右列上から10行 「内容のイスラエル軍の撤退」→「~~アラ~~全占領地からの『撤退』」  
17頁右列上から10行 「6・7年戦争の占領地からの撤退」→「~~アラ~~最近の紛争で占領された領域からのイスラエル軍の撤退」と、時期も占領地もありました。それ最終頁左列日誌の下から9行 「北アフリカ」→「北アフリカなどの」  
最終頁左列日誌の下から8行 「失業汚職」→「失業汚職」

#### 後記

「オリーブの樹」も150号を迎えました。最初は月刊で始め、次に隔月で、そして季刊へと発行回数を減らしながらも20年近く続けてきました。今は特別に48年前の、72年のリッダ戦争の頃、どのように活動し、過ごしていたのかを、様々な現場で活動される四人の方々に振り返って頂きました。えっと驚くエピソードや胸にしみるお話を、ありがとうございました。振り返る視線の先に、支え合いながら前に進む力が沸き上がってくるようを感じます。

重信さんの満期まで後約2年です。皆様どうぞ今後共、重信さんへのご支援頂きますようお願い致します。(Y)

重信房子さんへの郵送 アドレス 〒196-0035 東京都昭島市もぐせきの杜2-1-9 重信房子

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター 気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

発行価格 500円